牧草と園藝

5

主として関東軽鬆土地帯における

端境期の自給飼料對策

安孫子六郎

雲雀が鳴き桃の蕾も正に綻びんとする陽春三月は希望の陽春で野に働く人々の胸は高鳴るときであるが酪農家にとつては憂鬱なときでもある。サイロの底も尽き頼みの燕類も鬆入りがして品質が低下し、しかも牛体は冬の寒さに漸く耐えてすでに毛換り期になつているので最も栄養を多く要求する時期である。大方の乳牛は青刈りを待つこと切なる時期であるが、秋播きの青刈麦類はいまだ短く、しばらく辛抱しなくてはならない。乳量の低下に吐息しながら青刈りの伸びるのを千秋の思いで待つ苦しい時期である。

今冬の関東地方は十二月末より四十日余降雨がなく、寒風が吹き荒れたので、せつかくの燕麦も千葉県北総地帯は勿論、長生郡や君津郡あたりでも冬枯れの被害を聞く異例の年である。

まず問題になつた秋に播いた燕麦の冬枯れは、千葉県北総地帯では以前よりしばしばあることであるが、現在各方面で播いている燕麦の品種は北海道産の「前進」あるいは「ビクトリー」の系統であるので、これらは北海道では春播きするもので元来秋播性のものではないので、条件の悪い年は冬枯れすることがある。

冬枯れ防止の対策としては播種期を遅らせることである。即ち千葉郡印旛郡地方では十月二十五日以降十一月初旬に播けば冬枯れは完全に防止できる。それ以前に播いたものは冬枯れを受け易く、とくに九月下旬ないし十月上旬播きは普通の冬では全滅かあるいは相当の被害を逃れることはできない。

一方、飼料の給与面から考えると、遅播きして冬枯れを逃れても春早く給与できないという問題が起る。この解決策として秋播性燕麦を播くことである。筆者は数年来秋播性燕麦の品種を蒐めて試作の結果やや自信を得たものが数種あり、なお継続調査中であるが、発表して差支えないものの一つとして岡山黒を挙げたい。岡山黒は九月中下旬に播いても冬枯れが絶対になく、四月中旬には反当り千貫に達するので甚だ有利である。短所としては早生であり、再生力が弱いことであるので二番刈は大した期待できない。

「前進」「ビクトリー」系統は晩生で再生力も強く多収であるが冬枯れに弱い短所を有している。故に作付を計画するにあたつて仮りに一反歩の燕麦を播くときは左のごとき方法は如何であろう。

岡山黒　五畝　十月上中旬播
前進　五畝　十月下旬～十一月上旬播

かくすることにより冬枯れの心配もなく四月上旬より岡山黒の刈取りを開始し五月に至つて前進を収穫するということになり継続して給与できる。

「ライ麦」は九月上旬から十一月上中旬にかけて随時種播できるから安全である。九月上旬播いたものは十二月中に一番刈りが行われる。春は三月中旬から収穫できる。再生力も強いし収量も多いが、出穂すると急に茎葉が硬化して品質が低下する短所がある。ライ麦は早期収穫をなすと三番刈りまでできるが、収量は適期一回収穫に及ばない。最高の収量而も五月上旬に刈取期を予定する場合は大麦の播種適期と同じく十月中下旬である。冬に強い牧草は各種あるが、**「イタリアン ライグラス」**が最適と思う。「イタリアン」を十月上旬に播くと三月中旬には反当り三〇〇貫以上ある。しかも草質が軟く美味であるので乳牛は貪食して飽くことを知らない。九月中下旬播いて十二月ないし一月中に刈取つても冬枯れしない。反当り二〇〇貫は収穫できる。

「イタリアン」は再生力が旺盛で三月下旬よりは気温の上昇とともに生育早く三週間くらいで次回の収穫ができる。雨期明けまで五～六回収穫できるが、温度の上昇につれて再生とともに出穂し勝ちであるから、結実せしめぬよう常に早目に刈取り利用することである。刈取り毎に畦間に追肥することが好ましいことである。

「イタリアン」の跡地は耕起して秋作のルタバガ（スエーデン蕪）や「下総蕪」の播種期まで休閑するが晩播きの「玉蜀黍」「スーダン」「アフリカンミレット」を播くとよい。

「レープ」（飼料用菜種）も端境期の自給飼料として重要である。九月下旬より十月上中旬まで播けば三月上中旬より刈取りができる。反当り八〇〇貫以上は容易で乳牛の嗜好もすこぶるよい。注意すべきは刈取りが遅れると分枝して茎が硬くなり栄養分が低下し喰い残しが多くなるから、常に早目に刈取つて給与することが大切と思う。

端境期の根菜類として特筆すべきは、ルタバガ（スエーデン蕪）である。

ルタバガはよく「下総かぶ」と混同され各地に問題をしばしば起しているが、蕪類とは異なつた種類で、稚苗時代は菜種に酷似するのでよく問題になる。

普通秋播きの蕪類は三月に入ると一様に「鬆入り」となり飼料価値が非常に落ちてくるが、ルタバガは鬆入りすること少なく、固く緊まり、抽薹してきても鬆入りとならず、したがつて三月中旬のルタバガ三貫目は蕪の九貫目くらいに匹敵することは実際給与している酪農家は等しく認めるところである。嗜好性は蕪に勝り固形分も多いのでよく乳を出す端境期の根菜類として絶対的なもので、暖地酪農家として見逃すことのできないものであろう。

「ルタバガ」の初期生育が蕪類と比較して甚だ遅いので播種期も関東の平坦地で八月二十日頃にする必要がある。適期に播けば反当り二〇〇〇貫の収量がある。耐寒性も強いので蕪より扱い易い利点がある。また移植が効くので早目に育苗して置き九月中下旬本葉四～五枚で定植する方法もある。蕪類より常に二週間くらい早播きすることが増収の条件の一つである。

蕪類を一反歩播くときはその一割五分ないし二割の面積を「ルタバガ」のために割愛すると三月～四月の端境期は大いに助かるので、今後は重要視されるであろう。

苦しい端境期に牛がやせ乳量の低下を切実に体験するとき「備えあれば憂いなし」の諺の通り、今秋において来春の端境期に悔なき準備をやりたいと思う。

（雪印種苗、千葉農場長）